

百人一首、枕詞「あしびきの」の 翻訳方法

—— 英訳史とハンガリー語訳 ——

カーロイ・オルショヤ

1. は じ め に

『百人一首』の100首の中に枕詞が詠まれているのは僅か5首である。これらは「あしびきの」(3番)、「白妙の」(4番)、「ちはやふる」(17番)、「久方の」(33番、76番)である。今回はこの5首の中から3番の柿本人丸の歌、「あし曳の山どりのをのしだりをのながながしよをひとりかもねん」の枕詞の翻訳について論じる。

『百人一首』について書かれた本には、枕詞を歌の現代語訳に訳出せず、語釈等のみで言及されているものがほとんどある。それは、「あしびきの」も含め、枕詞の意味は平安時代に既に分からなくなっているからである。筆者もそれに倣い、『百人一首』のハンガリー語訳を試みた際、人丸歌の翻訳と合わせて日本語の原文、そしてローマ字表記を掲載し、語釈にて「あしびきの」について説明を加えた。しかし、和歌は僅か31文字の短い作品であり、枕詞はその中5文字もある。何等かの形で訳出しなければ、重要な技法が脱落し、ロスが生じてしまう。これをどのように解決すればよいか、筆者を長年悩ませてきた。フィットレル・アーロン氏と共同で『百人一首』のハンガリー語訳(2022年11月出版予定)を作成した際、人丸歌が筆者の担当和歌になり、枕詞翻訳の問題を更に探る必要があった。本論においては、その翻訳過程で辿った道、そしてみてきた最良の翻訳方法について述べる。また、これから翻訳を試みる翻訳者や研究者にも有用な資料になるよう、付録として人丸歌の現在までの英訳24種の原文も掲載した。

2. 「あしびきの」を何を基に訳すか

「あしびきの」については文学史の中で数多くの説明が見られる。久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』（古典ライブラリーデジタル版）は、奈良時代にはすでにその原義が不明となっていたとしており、また、古来からの解釈を以下のようにまとめている。

- ①太古の国土が未だ固まっていない時期に、人間が泥土に足をとられながら山に登ったという逸話や、天竺の一角仙人や推古天皇などが足を痛めて歩いたという故事から、足を引きずりながら山へ登る意
- ②その他、神々が蘆を引き捨てて国土を開いた際に、その蘆を捨てたところが山になったことから、「蘆引きの山」の意とする説
- ③足の気の病の意とする説
- ④「悪し日来の」の意であるとする説
- ⑤「馬酔木」（あしび・あせび）の木が生えている山の意とする説
- ⑥賀茂真淵は「しびき」は「繁木」であるとし、樹木が生い繁った山を愛でるところから、「天の繁木山」あるいは「青繁木山」「生ふ繁木山」の意からこの冠辞が発生したという説
- ⑦本居宣長は「足を引きたる城の山」であるとして山裾を長く引いた山の意ととらえる
- ⑧朝日の差す木の山の意とする説
- ⑨「茂檜木之　いかしひのきの」から転じたものとする説
- ⑩「岩根」「木の間」「嵐」に掛かる例が見受けられる。その際に、「あしひき」自体の中に「山」の意が込められている場合には、枕詞ではなく独立した歌語としての用法であるとみなすことも可能であろう。

以上のように、非常に多い説があげられており、その多さが語源の不明さを物語っている。無論一人一人の翻訳者・研究者はそれぞれの歌により、「あしびきの」を訳す際に以上のものから文脈の関係で適切だと判断するものを参考にし、翻訳・語釈を作成するであろう。どの解釈を採用するか、様々な選択肢がある。

例えば和歌を詠んだ歌人の解釈を尊重するか、後世の解釈を尊重するか、あるいは目標言語の特徴により選択するか等があげられるが、『百人一首』の歌の場合、選者定家の解釈通りに翻訳すべきである。

3. 「あしびきの」がどう訳されてきたか

『百人一首』には英訳の前例が多くみられる。初めての英訳は江戸時代末期である 1865 年に、Frederick V. Dickins により作成され、その後も多くの翻訳者・研究者・詩人により『百人一首』の英訳が作られてきた。これらの翻訳は日本語、そして古典文法・古典文学の理解度が異なり、時代によっても翻訳者がアクセスできた文献等が異なる。そのため、全ての翻訳が古典和歌の技法を考慮して作られたわけではない可能性があることを断っておきたい。しかし、これらの英訳を分析することが翻訳をする際のヒントになり、翻訳者自身が今まで気づかなかった問題点も発見できる。あるいは、英訳を通して『百人一首』の和歌そのものの解釈を再検討することも可能である。以下、「あしびきの」が英訳の中で訳出されているか、訳出されているのであれば、それがどの解釈を基に作られたかをみていくことにする。

本論において分析した 24 種類の英訳の中¹⁾、「あしびきの」を訳出していないのは Porter 訳、Tanaka 訳、Yasuda 訳、Honda 訳、Levy 訳、Miyata 訳、Takei 訳、Kirkup 監修訳、Idei 訳、そして Varnam-Atkin 訳の 10 訳である。それに対して訳出しているのは Dickins の三つの訳とも、McCauley 訳、Noguchi 訳、Komiya 訳、Rexroth 訳、Sharman 訳、Galt 訳、Carter 訳、Mostow 訳、そして MacMillan の二つの訳の合計 13 訳である。Miyashita-Welch 訳については後に述べる。

興味深いのは、「あしびきの」を訳出している翻訳者の中には日本人訳者が 2 名のみに留まるのに対し、訳出していない翻訳者の中に 6 名もいるということである²⁾。日本人のこのような高い割合には、枕詞を現代日本語に訳さないことが影響しているのであろう。

英訳史最初の訳を作った Dickins 氏は「あしびきの」を訳出している。最初に枕詞を訳出していない訳者は Porter 氏である。その 1909 年の訳は以下の通りである。

百人一首、枕詞「あしびきの」の翻訳方法

LONG is the mountain pheasant's tail

That curves down in it's flight ;

But longer, still, it seems to me,

Left in my lonely plight,

Is this unending night.

日本語訳：ヤマドリが飛んでいる時にぶら下がっている尾が長い。でも、寂しい状態で残された私にとっては、この終わらない夜の方がもっと長く感じる。

ここで Porter 氏は「あしびきの」を省略し、尾の長さとし寂しい夜の長さをのみ訳出している。原文のローマ字表記を記載しており、「あしびきの」についてはヤマドリの名前に含まれている「山」にかかる枕詞であることについて言及している。Porter 訳の前に既に 5 つの英訳が出版されているが、これらの全ては枕詞を訳出している。この中に Noguchi 氏と Komiya 氏、二人の日本人の訳も見られる。Komiya 訳には Dickins 訳の影響が強くみられるので、枕詞訳出の原因はそこにあると考える。Noguchi 訳は 1907 年に出ており、Komiya 訳は 1908 年に出版されている。その後、枕詞が訳出されている日本人による英訳が見られなくなる。

枕詞を訳出しているものの中に以下の訳し方がみられる。

Dickins (1865 年、1866 年)	sweeps o'er the ground: so drags the night.
McCauley (1899 年)	foot-drawn trail
Noguchi (1907 年)	dragging
Komiya (1908 年)	its long tail sweeps over the ground
Dickins (1909 年)	his feathery tail drags
Rexroth (1964 年)	tiring to the feet,
Sharman (1965 年)	the drag on foot tree
Galt (1982 年)	drag their feet and drag their tails
Carter (1991 年)	foot-wearying hills:
Mostov (1996)	dragging tail
MacMillan (2008 年、2017 年)	drags on and on

「あしびきの」の訳として最も多く見られる例は、太文字で示している「drag」である。「drag」は足、または尾をひきずる意味であるので、章2で示した、①の「天竺の一角仙人や推古天皇などが足を痛めて歩いたという故事から、足を引きずりながら山へ登る意」説を意識した訳であるといえよう。あるいは、ただ単に「あしびきの」の「ひき」を訳したものかもしれない。McCauley 訳の「foot-drawn」も同じ意味であり、「足を引く」という意味である。また Dickens 訳、そして Komiya 訳で見られる「sweeps over the ground」（地面の上を引きずる）も同じ解釈の基で訳されたといえよう。

この多くの訳に見られる「drag」は、例えば小学館の『ランダムハウス英和大辞典』で説明されているように、足や尾を引きずる意味だけではない。この単語は、のろのろと進むという意味も含まれている。ヤマドリが尾をひきずることと、独りで過ごす寂しい夜が中々終わらないことという両方の意味が含まれていることにより、掛詞的な要素をもっているといえる。他に言及する必要があるのは Sharman 訳である。これは「あしびきの」の「き」を「木」としており、「足を引く木」として訳出し、掛詞的な要素をもたらしとしている。興味深いことに、複数回訳している Dickens 氏も、MacMillan 氏も、「あしびきの」の訳に関しては訳を変えていない。

以上の表から省いている Miyashita-Welch 訳（2008 年）は以下の通りである。

on a rugged mountain peak
a copper pheasant falls asleep
drooping its lengthy tail —
must I too sleep alone
through this long long night?

日本語訳：険しい山の頂上でヤマドリが眠りに落ちる、長い尾をぶら下げて。私はこの長い、長い夜、一人で寝ないといけないの？

この訳が舞台としている山をヤマドリからとっているか、あるいは「あしびきの」は山の別名であるという解釈を意識して作られたか不明であり、枕詞を訳出

しているか否か、判断が難しい訳である。

以上のように、英訳においては「あしびきの」が主に「ひきずる」という意味で訳出されているように見える。これに「drag」の、長い夜と結びつく意味合いも関係しているのではないか。ただし、定家の解釈として、これが妥当か否かが問題になってくる。

長谷川哲夫氏が指摘しているように³⁾、現存する定家の自筆の三代集では「あしびきの」に漢字を当てる場合、「葦引きの」と表記しており、「足引きの」の例はない。そのため、『百人一首』以外の和歌集の場合「足や尾をひきずる」のような訳し方が可能であっても、定家選である『百人一首』の場合相応しくないとはいえるのではないだろうか。また新田菜穂子氏が定家の『顕注密勘』の枕詞についての記述をまとめ⁴⁾、その中に、

ひさかた、あし引き、玉ほこ、ちはやぶる、かようにつゞくる事は、只空とも山とも道とも神とも、又空云につきて月ともあめとも、神につけてかもともひら野ともよむ事はたゞつゞくことばかり心得て、このうへ足を引、ちはやをふり、いはをうらわると迄は、まなびならひ侍らず。

とある。これを考慮すれば、人丸歌を『百人一首』の歌として翻訳するのであれば、「ひきずる」という意味合いを避けた方がよさそうである。

4. ハンガリー語訳 —— 作成の過程と翻訳の実例

ここで筆者の今までの翻訳の試みを詳しく紹介し、定家解釈での「あしびきの」の翻訳としてもっとも相応しい翻訳方法について考察する。

用例 1

Rézfácán farka

Hosszú, omlik le

hosszú mint az éj

melyet magányos ágyban

egyedül töltök el tán

日本語訳：ヤマドリの尾、長い、ぶら下がっている、私は寂しい寝床で過ごすで

あろう夜のように長い。

この訳は、筆者が日本で『百人一首』の研究を始めたころの試みである。枕詞は訳さない（訳せない）修辞法であるという認識のもとで作成し、枕詞を省いている。詠歌主体が独りで過ごす夜の長さがヤマドリの長い尾に喩えられている主題のみを訳出したものである。

用例 2

Rézfácán farka
hosszú, omlik le
hosszú mint az éj,
melyet magányos ágyban
egyedül tölt tán a lány

日本語訳：ヤマドリの尾、長い、ぶら下がっている、彼女は寂しい寝床で過ごすであろう夜のように長い。

筆者は人丸歌について、夜を独りで過ごすのは男ではなく、来ない男の訪れを待っている女であると論じたことがある⁵⁾。この解釈を強調するため、夜を独りで過ごす人を「lány」（女性、彼女。若い女性を示す単語。）と独り寝をするのはだれかを明白に訳した。しかし、このような解釈が可能であっても、元の歌にはこれが明確にされておらず、様々な解釈の余地が残されている。性別を単語上でこのように明白にすると、他の解釈が不可能になってしまい、そういったところで原歌と遠ざかってしまうため、この訳は相応しくないと判断した。

用例 3

Fenn a hegyekben
rézfácánnak farktolla,
lelógó tolla
hosszú, hosszú, mint az éj…

egyedül hálók talán?

日本語訳：山の中でヤマドリの尾、ぶら下がっている尾が長い、私が独りで過ごすのであろう夜のように長い。

用例 1 と用例 2 では枕詞が省略されている。しかし、31 文字の中 5 文字の技法を完全に省くことによりロスが生じることを恐れ、定家の見解が尊重され、かつ一行目の枕詞を省かない方法がないかを考えた。たどり着いたのは、以上の訳である。ヤマドリを指す「rézfácán」に「山」という単語は含まれていないことから、「あしびきの」を「Fenn a hegyekben」（山の中で）として訳出した。しかし、その後定家解釈としては、このように明確にヤマドリがいる場所を指定するのも相応しくないと考え、用例 4 のように書き換えた。

用例 4

Messze elnyúló

hegyek. Rézfácán tolla,

lelógó tolla

hosszú, hosszú, mint az éj…

egyedül hálók talán?

日本語訳：遠くたなびく山。ヤマドリの尾、ぶら下がっている尾が長い、私が独りで過ごすのであろう夜のように長い。

用例 4 は現在筆者がもっとも相応しいハンガリー語訳であると考えているものである。枕詞以外例 3 と同様であり、「あしびきの」を「山の中で」から「messze elnyúló hegyek」（遠くたなびく山）に変えたものである。この「遠くたなびく山」はヤマドリの尾とつながっていると同時に、間接的に「山」という単語も思い起こさせる。なぜなら、ハンガリー語ではこの「elnyúló」という単語は山脈にも多く使われているからである。この訳は定家の解釈にも矛盾せず、技法のロスも生じない。

5. 終 わ り に

本論でみてきた歌枕、「あしびきの」は筆者が『百人一首』のハンガリー語訳を作成した際に、翻訳が最も困難な歌であると感じた。その理由は、枕詞の解釈が非常に多いのに対し、定家自身はそれらの解釈を否定したからである。

現代日本語で枕詞を訳さない理由の一つは、文学的な訳ではなく、単に説明的なものになるからであろう。また意味が分からなくても、読者が原文を読めて、枕詞を視覚的に、あるいは聴覚的に鑑賞できる。しかし、外国語から省くと、その技法を鑑賞できなくなり、技法のロスが生じてしまう。そのためか、英訳においては、特に外国人の訳者が「あしびきの」を訳す方向で訳を作成してきた。しかし、それは定家の解釈と異なる解釈なので、これから定家解釈を尊重した英訳が登場するのを期待している。

筆者のハンガリー語訳は幾つかの解釈の基に作られたものを経て、ようやく定家解釈としてもっともふさわしいものにたどり着いたと考える。ただ、完璧な翻訳は存在しないというのではなく、常に研究を重ね、より良い翻訳を目指すべきであると考えている。

6. 付 録

「あしびきの」歌の英訳⁶⁾

1. Dickens (1865)

The hill-side fowl his long-drooped tail
Sweeps o'er the ground : so drags the night.
My lonely plight
I mourn : -my sleepless wretchedness bewail.

2. Dickens (1866)

The hill-side fowl his long-drooped tail
Sweeps o'er the ground — so drags the night.
My lonely plight

百人一首、枕詞「あしびきの」の翻訳方法

I mourn — my sleepless wretchedness bewail.

3. McCauley (1899)

Ah! The foot-drawn trail
Of the mountain-pheasant's tail
Drooped like down-curved branch! —
Through this long, long-dragging night
Must I keep my couch alone?

4. Noguchi (1907)

What a long night!
How could I sleep alone!
How the night drags! — (Dragging
As a mountain fowl's long-dropped tail)

5. Komiya (1908)

The hill-side jowl with its long tail sweeps over the
ground, I mourn my loveliness through so long night and
I bewail my sleepless wretchedness.

6. Dickins (1909)

The long hours slowly
drag as the mountain-bird
his feathery tail drags
amid the leafy forests —
for my lonely couch is sleepless

7. Porter (1909)

LONG is the mountain pheasant's tail
That curves down in it's flight ;

But longer, still, it seems to me,
Left in my lonely plight,
Is this unending night.

8. Tanaka (1938)

I am to retire
In this long and lonesome night
With myself alone
As a wild copper pheasant
With its long and drooping tail!

9. Yasuda (1948)

Like the long and deep
night as lengthy as the fair
copper-pheasant train
Trailing downward, must I sleep
By myself abed in vain?

10. Honda (1947, 1957)

O how is doth ail
Me to lie in bed and brood
Alone the live-long night, -
Night which seems like the long tail
Of the pheasant of the wood!

11. Rexroth (1964)

The pheasant of the mountain
Tiring to the feet,
Spreads his tail feathers.
Through the long, long night

I sleep alone.

12. Sharman (1965)

The dragonfoot tree

Holds a mountain-bird whose tail,

Whose down-swooping tail,

Spreads like a long, long night spent

Alone and, maybe, asleep.

13. Levy (1976, 1984)

Like

the long

tail

of

the mountain pheasant

long long

this night

and

must I sleep alone?

14. Miyata (1981)

Trailing long indeed

Is a mountain pheasant's tail,

Stretching long behind —

So is this and this long night

Lonely must I pass in vain

15. Galt (1982)

The wild hill pheasants

Drag their feet and drag their tails,

Splendid though they be,
Through this long, long weary night
Like me, lying here alone.

16 Takei (1985)

Autumn nights are long as a drooping tail of a pheasant
living in the mountains — must I sleep alone?

17 Kirkup 監修 (1989)

I wonder if I must pass
This long evening, long
As a copper peasant's tail,
In lonely slumber?

18. Carter (1991)

Long as the long tail
of pheasants of the mountains,
foot-wearying hills :
so long is the night before me
when I must spend it alone

19. Idei (1991)

The long sweep
Of the pheasant's tail
Drooping, drooping……
Am I to sleep alone
Yet again this night

20. Mostow (1996)

Must I sleep alone

百人一首、枕詞「あしびきの」の翻訳方法

through the long autumn nights,
long like the dragging tail
of the mountain pheasant
separated from his dove?

21. MacMillan (2008)

The
long
tail
of
the
copper
pheasant
trails—
drags
on
and
on
like
this
long
night
in
the
lonely
mountains
where
like
that
bird

I too
must
sleep
without
my
love.

22. Miyashita-Welch (2008)
on a rugged mountain peak
a copper pheasant falls asleep
drooping its lengthy tail —
must I too sleep alone
through this long long night?

23. Varnam-Atkin (2011)
As long as a pheasant's tail,
This tedious mountain night.
And to sleep without you in my arms
Is now my tedious plight.

24. MacMillan (2017)
The
long
tail
of
the
copper
pheasant
trails —
drags

百人一首、枕詞「あしびきの」の翻訳方法

on
and
on
like
this
long
night
in
the
lonely
mountains
longing
for
my
love

注

- 1) 本文と年代は付録を参照。
- 2) Kirkup 監修訳は日本人の高校生が訳したものを Kirkup 氏が英語修正したものであるので、これも含めば8名になる。
- 3) 長谷川哲夫 (2015) 『百人一首私注』 風間書房 34 頁
- 4) 新田菜穂子 『顕注密勘』 考：顕昭注と 『和歌色葉』 中巻・下巻との関わりをめぐって (三田國文 (65), 1-40, 2020-12)
- 5) カーロイ・オルショヤ 『百人一首』 「あしびきの」 歌の性別と翻訳 (解釈 63 (9・10), 8-17, 2017-09)
- 6) 英訳本 (年代順)

- ・ A Medical Officer of the Royal Navy, *Translations of JAPANESE ODES, from the H'YAK NIN IS' SHIU* (Stanzas from a Hundred Poets.), The Chinese and Japanese Repository, Vol. 3: March 137-9, April 185-7, May 249-53, June 296-9, July 343-5, Aug. 389-94, Sept. 438-43, Oct. 484-7, Nov. 537-8. 1865 年
- ・ DICKINS F. V. (1866) *Hyak Nin Is'shiu*. Smith & Elder & Co.
- ・ MCCAULEY, Clay (1899) *Hyakunin-Isshū (Single Songs of a Hundred Poets)*. The

Asiatic Society of Japan

- ・野口米次郎 (1907) *Hyaku Nin Isshu in English*. 『早稲田文学』 5 月 (76~78)、6 月 (53~7)、8 月 (71~5)、9 月 (142~8)
- ・小宮水心 (1908) 『百人一首：欧文訳・小品文訳・五言絶句訳』 石塚書舗
- ・DICKINS, F. V. (1909) *A Translation of the Japanese Anthology Known as Hyakunin Isshu, or Hundred Poems by a Hundred Poets*. Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and London. 357~391 頁
- ・PORTER, William (1909) *A Hundred Verses from Old Japan*. Clarendon Press
- ・田中ふくぞう (1938) *Songs of Hyakunin-issu Anglicized*. (出版社不明)
- ・本多平八郎 (1947) *A Hundred Poems from a Hundred Poets*. 関書院
- ・安田健 (1948) *Poem Card*. 鎌倉文庫
- ・Rexroth, Kenneth (1964) 100 Poems from the Japanese, New Directions
- ・GRANT, Sharman (1965) *One Hundred Poets: A Japanese Anthology, Ogura Hyakunin Isshu*. Monigraph Committee
- ・LEVY, Howard S. (1976) *Japan's Best Loved Poetry Classic: Hyakunin Isshu*. Langstaff Publications
- ・宮田明夫 (1981) *The Ogura Anthology of Japanese Waka*. 大坂教育図書株式会社
- ・GALT, Tom (1982) *The Little Treasury of One Hundred People, One Poem Each*. Princeton University Press
- ・KIRKUP, James 監修 (1989) *One Hundred Poems by One Hundred Poets*. 北海道室蘭清水丘高等学校
- ・出井光哉 (1991) 『プラス英訳百人一首』 風塵社
- ・CARTER, Steven (1991) *One Hundred Poems by One Hundred Poets*. (Traditional Japanese Poetry: An Anthology) Stanford University Press
- ・MOSTOW, Joshua S. (1996) *Pictures of the Heart — The Hyakunin Isshu in Word and Image*. University of Hawai'i Press
- ・MCMILLAN, Peter (2008) *A Translation of the Ogura Hyakunin Isshu — One Hundred Poets, One Poem Each*. Columbia University Press
- ・宮下恵美子、マイケル・ディラン・ウェルチ (2008) 『百人一首』 ビエ・ブックス
- ・VARNAM-ATKIN, Stuart (2011、2012) 『バイリンガル版ちはやふる』 講談社
- ・WATSON, Frank (2012) *One Hundred Leaves*. Plum White Press
- ・MACMILLAN, Peter (2018) *One Hundred Poets, One Poem Each*. Penguin Classics